

ヴィゴツキーの『高次精神機能の発達史』に関する再検討 —欠陥学研究の位置づけをめぐって—

岡花 祈一郎¹

The Reviews “The History of the Development of Higher Mental Functions” from Defectological Perspective

Kiichiro Okahana¹

The purpose of this study is to examine Vygotsky's work, “The History of the Development of Higher Mental Functions” (1931) from defectological perspective. L. S. Vygotsky (1896-1934) was an early twentieth-century Russian psychologist who have researched about the development and education of normal and abnormal children. It has been recognized that this work was one of the most important literature of Cultural-Historical theory. On the other hand, little attention has been given to defectological aspects to “The History of the Development of Higher Mental Functions”. In this work, Vygotsky argued not only the development of normal children but also the development of deaf and blind intellectual disability children. He employed the comparative psychological approaches for his developmental theories. He has examined distinction and each features of the normal child development and the disabled development. It is his assertion that a fundamental methodological view according to which the essence and nature of the phenomena studied by psychology can be revealed in their purest form in the extreme, pathological forms. The key to psychology is in defectology. “The History of the Development of Higher Mental Functions” is the work about the general development of children, the Cultural-Historical theories that not only for normal children but for disabled children.

Key Words : L. S. Vygotsky, Defectology, “The History of the Development of Higher Mental Functions”, Cultural-Historical Theories

1. はじめに

ヴィゴツキー（Л. С. Выготский 1896-1934）の250を超える著作のなかに『高次精神機能の発達史』（История развития высших психических функций）という文献がある¹⁾。1930年頃に著されたとされるこの論文は、「高次精神機能」と呼ばれるヴィゴツキーがとりわけ重視した随意的注意、随意的記憶、思考といった認知過程の発達について体系的に論じたものである。

『高次精神機能の発達史』は、1930年頃とい

うヴィゴツキー自身が独自の発達論をまとめた時期の著作であり、文化—歴史的理論を体系的にまとめた執筆した唯一の著作とされている（Scribner, 1985）。これまでの研究のなかでは Van der Veer & Valsiner (1991) が指摘しているように、文化—歴史的理論の到達点として読まれてきた。その一方で、ヴィゴツキー欠陥学に関する先行研究のなかではこの著作が取り上げられることは少なく、欠陥学という観点から分析されることはほとんどなかったといえる²⁾。なお、欠陥学（дефектология）とはロシア・ソビエトでの障害をもつ子どもの発達と教育に関する研究領域のことである。

1 広島大学大学院（現 幼年教育研究施設）

本稿では『高次精神機能の発達史』について概要を整理し、そのなかで欠陥学研究がどのような役割を果たしているのかについて明らかにすることを目的とする。この著作のなかの欠陥学の位置づけを検討することは、文化-歴史的理論における欠陥学の位置づけ、さらにヴィゴツキー発達論における欠陥学の位置づけを検討する際のケーススタディとして意義のあるものであると考えられる。

2、『高次精神機能の発達史』成立に関する諸問題とその構成

『高次精神機能の発達史』はレオンチェフ(A. H. Леонтьев)らによって1960年にモスクワで出版された。そこでは、1930年から31年に執筆されながら、草稿のままになっていたものをまとめたとされていた²⁾。しかし、第2章「研究の方法」でヴィゴツキーは「具体的個別的研究の叙述にあてられた章で、われわれは再びわれわれが採用している実験の方法や技術の特殊な形態の検討に戻る機会をもてらさう」(C. 42:57頁)と述べているにもかかわらず、この1960年の時点では該当箇所と思われる後半部分にあたるものは所収されておらず未定稿とされていた。ところが、1983年、マチュールシキンらの編集により『ヴィゴツキー著作集』第3巻のなかに前半部分とあわせて完全な形として出版された。『ヴィゴツキー著作集』第3巻のなかで登場した『高次精神機能の発達史』の構成は以下の通りである。

『高次精神機能の発達史』の章立て構成

第1章	高次精神機能の発達の問題
第2章	研究の方法
第3章	高次精神機能の分析
第4章	高次精神機能の構造
第5章	高次精神機能の発生
第6章	話ことばの発達
第7章	書き言葉の前史
第8章	算術操作の発達
第9章	注意の習得
第10章	記憶と記憶術機能の発達
第11章	ことばと思考の発達
第12章	自己行動の制御
第13章	高次の行動形式の教育
第14章	文化的年齢の問題
第15章	総括 今後の研究の道程

1983年の『ヴィゴツキー著作集』第3巻の註では、「第6章から第15章までは初めて公表されるものである。1960年版の注釈ではこれらの章は書かれなかったと誤った記載がされている」とある³⁾。これらの章が公表されなかった経緯などについてはそれ以上の記述が無い。

章立てを概観してみると、第1章から第5章までが理論編、第6章から12章までが具体的な心理諸機能の発達の分析として構成されているようである。また、第13章、14章、15章では、当時ヴィゴツキーが関わっていた児童学の知見や人格論、情動の問題などについての言及がみられ、その後のヴィゴツキー発達論の方向性を感じさせるような記述になっている。

これまでの研究では、「高次精神機能の社会的起源と間接的構造に関する彼にとってもっとも重要な理論的命題にふれるとともに、それらを研究する基本的な原理的方法論を検討している」著作として文化-歴史的理論をまとめた理論的大著としてみられてきた⁴⁾。その一方で、ヴィゴツキー自身がこのような編纂をしたかは定かではなく、論述に整合性が欠ける部分もあり謎の残る「モノグラフ」としての位置づけられる著作である。

また、欠陥学の位置づけに関しては、第7章「書きことばの前史」という論稿の存在が注目される。この論文はすでに1935年の『教授過程における子どもの知的発達』に所収され公表されていた。その註には1928-29年に執筆された『健常児と障害児の文化的発達史』の第7章と書かれているのである⁵⁾。『高次精神機能の発達史』と『健常児と障害児の文化的発達史』という類似したタイトル、そして、いずれも同じ第7章に「書きことばの前史」が位置づけられている。『健常児と障害児の文化的発達史』のそれ以外の章の内容については不明であるが、仮にヴァリエーションであるとするならば『高次精神機能の発達史』における欠陥学の位置づけを検討する意義は大きいと考えられる。

障害児の発達に関して論じているのは、前半においては特に第2章「研究の方法」の箇所、また後半部分に関しては第7章「書きことばの前史」第8章「算術操作の発達」第9章「注意の習得」第12章「自己行動の制御」第13章「高次の行動形式の教育」などの章にみられる。いずれの章においても、まとめ(最後)の部分に欠陥学、障害をもつ子どもの発達に関する記述がみられる。また、障害の種類に関しては聾啞

だけでなく、知的障害や精神障害者の発達についても論じている。

このように、欠陥学研究所の知見が随所に組み込まれているにもかかわらず、『高次精神機能の発達史』は、これまでのヴィゴツキー研究においてほとんど検討されてこなかった。本稿では、理論編である前半部分において、なぜ高次精神機能の発達を明らかにするために健常児と障害児の両者の発達をみようとしたのか、さらにそれぞれの章で欠陥学研究所の知見がどのように記述されているのかについて検討を行う。

3、自然的発達と文化的発達の交差と不一致：方法論に着目して

1) 方法論における二つの特徴

『高次精神機能の発達史』における欠陥学の位置づけが最も鮮明に浮かび上がってくる箇所は方法論に関して議論している部分である。

ヴィゴツキーは高次精神機能の発達を明らかにする方法論として以下の2点を挙げている。第一に発生的-歴史的方法論である。「第2章研究の方法」において次のように述べている。「何かを歴史的に研究するということは、それを運動のなかで研究することを意味する。それは、弁証法の基本的要求である。研究において何らかの物の発達過程をあらゆる相の変化のなかで-発生から死滅まで-理解することは本質的にその物の本性をあきらかにし、その本質を認識することを意味する」(C. 62: 邦訳81頁)。発生的に、そして、「あらゆる相の変化」の過程として理解すること、これがヴィゴツキーの方法論である。『高次精神機能の発達史』というその題名にもあらわれているように、ヴィゴツキーは随意的注意や記憶や思考といった高次精神機能といった心理諸機能の発達を歴史的にとらえようとする。このような発達をとらえる際のスタンスは一貫したものであった。そして、第二に文化的発達の異なるタイプの比較研究である。「正常なタイプからの逸脱、発達過程の病的変化は我々の問題からすると実際の児童心理学においてもそうであるが、特別に準備した自然的実験のようなものであり、我々が感心をもつ過程の真の本性や構造を我々の前にしばしば強烈な形で暴き出す」(C. 36: 48頁)。ここでヴィゴツキーは比較心理学的な立場をとっている。健常児と障害児の発達の特徴を明らかにし、それを比較検討することで高次精神機能の発達(文化的発達)のありようを解明しようと

したのである。

ヴィゴツキーは当時の欠陥学研究所は、障害児を消極的特徴づけによってとらえることでその積極的可能性に目をむけなかったことを批判する。それは障害をもつ子どもの特性を量的に「できない」ことによりとらえ、文化的発達といった高次精神機能については全く検討されてこなかった。「(障害をもつ子どもに関する)このポジティブな写真はわれわれが子どもの発達に関するわれわれの表象を根本的に改め、それが複雑な弁証法的過程であり、複雑な周期性、個々の機能の発達における不均衡、ある形態から他の形態への変態あるいは質的变化、進化と退化の複雑な交錯、外的要因と内的要因との複雑な交叉、困難の克服と適応の複雑な過程によって特徴づけられる」(C. 82)。障害児は文化的行動においても遅滞と逸脱と困難といったものをつくりだすが、しかし、その一方で「文化的発達の回り道」というものを独自の発達の道筋をたどるというのである。障害があるということによって文化的発達の道が閉ざされているのではなく、独自の構造をもったより高次な発達をも可能とする。すなわち、消極的側面だけでなく、障害児のもつ発達の独自性に目をむけることで、その特質、そして、高次精神機能の発達を描き出そうとしたのである。

では、ヴィゴツキーは健常児の発達と障害児の発達、それぞれどのように異なっているととらえているのだろうか。

2) 自然的発達と文化的発達との不一致

健常児と障害児の差異、違いをヴィゴツキーはふたつの発達概念によって説明しようとする。ひとつは、生物学的で有機体的な成長の過程である自然的発達であり、もうひとつが文化的な手段の習得である文化的発達である。これらの二つの発達の経路は文化-歴史的理論の基礎概念として使用されており、「子どもの文化的発達の問題」(1928)にすでに登場している⁶⁾。ここで注意をしなければならないのは、ヴィゴツキーは自然的発達と文化的発達を二元論的にとらえているわけではないという点である。ヴィゴツキーは自然と文化を対比しながら発達をとらえる。この際の自然と文化の関係性についてヴィゴツキーは「文化は何ものも創造するわけではなく、文化は自然的所与を人間の目的に従って変えているにすぎない」(C. 32: 43頁)という立場に立っている。言い換えれば、発達においても自然的発達という基礎の上に、高次

の文化的な行動様式が建築されると考えているのである。さらに自然的発達とは文化的発達に淘汰されるのではなく、文化的発達の背後に止揚されると弁証法的にとらえているのである。

健常児の発達ではこの自然的発達と文化的発達は進むにつれて融合し統一的な過程となる。しかし、障害児の場合はそうではないという。「障害児の精神発達の基本的特徴は、健常児の発達において融合している発達の両面の分岐、不一致、食い違いにあるということが出来る。この両列は一致せず、食い違い融合した統一的過程を形成することができない。ひとつの系列における脱落、脱漏は他の系列における異なる脱落の場所を呼び起こすのである。文化的発達の回り道は特別の実験的目的のためにわざと用意されたような行動形態をつくりだす」(C39:52頁)。健常の子どもは外的世界から入ってくる音をもとに話し言葉を習得する。そして、その言葉は思考の道具として、注意の道具として、自己統制の道具としての機能を果たす。しかし、聾唖の子どもはその障害から言葉の獲得に支障をきたす。そのため、「回り道」をして他の器官から、すなわち、触覚や視覚を通して言葉を理解し習得しなければならない。障害をもつ子どもはこの自然的発達の可能性が乏しいことで、文化的発達の可能性も一定程度制限されるというのである。

『高次精神機能の発達史』において、ヴィゴツキーは健常児と障害児の文化的発達の歴史を本質的には同一のものとして、形態としては異なる過程をたどるものとしてとらえている。「我々はそこでもここでも一正常な場合でも病理的な場合でも一つの対称的命題、すなわち、これら二つの場合の発達と未発達における二つの路線の融合と合流を検討しなければならなかった。生物学的なものとは文化的なものとは病理的な場合も正常な場合も、異なる特別な発達形態を現し、互いに並んで共存するのではなく、一方が他方の上であり、機械的に結びついているのではなく、ひとつの、しかし複雑な高次の総合において合流している。この総合の構成と発達の基本的法則を明らかにすること、これが我々の研究の基本的命題である」(C. 40:54頁)。

このようにして、ヴィゴツキーは自然的発達と文化的発達という二つの発達の路線の交叉と不一致により、健常児と障害児の発達を比較検討しようとする。障害児の発達は、その欠陥の

ために回り道をしなければならないという自然的に用意された「実験」のようなものであり、その発達の食い違いをみるようにした。「高次精神機能の発達を理解する鍵」を、「いわゆる欠陥児、低次な子どもの発達の歴史」のなかにみいだそうとするのである (C. 36:49頁)。

4. 『高次精神機能の発達史』における欠陥学の記述分析

1) 「書きことばの前史」における

盲児の書きことば

ヴィゴツキーは第7章「書きことばの前史」において、書きことばを習熟の結果としてではなく、はるかに長い歴史としてとらえようとする。書きことばには、身振り、なぐり書き、描画という前史が存在する。ヴィゴツキーはこの章の終盤で、盲児の書きことばの発達に目をむけている。「盲児では、歴史的発達の過程で形成された記号体系と盲児固有の発達との間に乖離がある。そこでわれわれは特別な文化的技術、心理学的には同じ機能を遂行する特別な記号体系を創り出す」(C. 200:256頁)。従来の教育では、盲児に対しては、まず話ことばを、次に書きことばを教えていたが、それは「致命的なあやまり」であるという。ヴィゴツキーは「盲児の書きことばの基本的形態、第一次の象徴的表現は書きことばでなければならない」と主張している(同上)。それは、視覚的なものではなく運動的なものとして意味を理解していくというのである。「絵を描くことができないことは、盲児の書きことばの発達を大きく遅らせる。だが、身振りによって対象に意義や意味があたえられる遊びが盲児を直接的に書きことばへ導く。点字の助けによって盲児は読み書きする。盲児が2本の指によって読む運動的習熟の深い独自性は、視覚が視野とは全く違ったふう構成されているということによって説明される」(C. 199:255頁)。ここでヴィゴツキーは盲児の読み書きの独自性に触れている。目で文字を読むことと点字で読むことは「視覚と視野」が全く異なる構成となっているのである。このように、視覚障害をもった子どもの発達の独自性をヴィゴツキーはみようとす。書きことばの前史である身振りから盲児は書きことばを理解できるというのである。

2) 聾唖児と知的障害児における「注意の習得」

ヴィゴツキーは高次精神機能のひとつである注意の発達について第9章「注意の習得」で論

じている。この章では自然的な注意、いいかえれば、外的な刺激に対する受動的な注意から、随意的に注意を制御する方向性への発達を道筋を示している。外的な刺激や他者の指示に対して能動的に注意をむけるためには、言葉の発達が重要である。言葉は他者への指示（自己への指示）として注意をうながし、外的な状況に対して能動的に注意をむける道具となる。

では、この注意を制御する言葉が習得困難な聾唖の子どもの発達はどのようになるのか。ヴィゴツキーは「逆説的なふたつの徴候」を指摘する。一方では、言葉の欠如による随意的注意の未発達の状態、他方では、「聾唖児は健常児と比べてはるかに被媒介的注意を使用しようとする傾向を示す。健常児においては言葉の影響の下で自動的習慣として行われていることが、聾唖児の場合には新鮮な過程であってそのため、聾唖児はあらゆる困難にもかかわらず、きわめて喜んで問題解決の直接的な道から離れ被媒介的注意に頼ろうとする」（C. 192：289頁）。ここでいう「被媒介的注意」とは何らかの媒介手段、言葉や記号などによって媒介され制御される注意のことである。記号は媒介される存在として主体である子どもによって操作される。ヴィゴツキーはここで、文化的発達の特徴である何らかの媒介手段に頼った注意が聾唖児の発達にみられることを指摘しているのである。

注意の発達に関しては聾唖児だけでなく知的障害児においても不安定さがみられる。言葉の発達に障害が無いにもかかわらず、それは、自己の注意をコントロールできずに不注意や注意力散漫とみなされることが多い。ヴィゴツキーは「子ども自身が適切な言葉を使い、その後に必要な対象を選択する。言いかえれば、子ども自身が自分に対して能動的注意を適用するようになる」と言葉と注意の関係をここでも強調する（C. 187：293頁）。ヴィゴツキーは「知能の発達不全」により、自己の注意を制御することができないという。また一方で、「事物による具体的知覚から抽象を行うところの概念的思考の未発達」も特徴としてあげている（C. 187：294頁）。すなわち、知的障害児は言語という媒介手段が注意や概念的思考の道具となっておらず、二つの発達の道筋が一致していないことを原因としてあげているのである。しかし、この章において知的障害の注意の発達についてはヴィゴツキーはこれ以上のことを述べておらず論拠に不十分さも感じさせるものとなっている。

3) 「高次の行動形式の教育」における 欠陥をもつ子どもの教育

ヴィゴツキーは13章（「高次の行動形式の教育」）において、高次精神機能の発達と教育の関係について論じている。ヴィゴツキーは一定の発達段階と経験の蓄積で言葉を習得し、他方では、計算できるようになるといった発達のとらえかたを否定する。このような考え方では、経験の量と発達路線との完全な一致、完全な調和が実際に存在し、それが積み重なった断続的变化として発達がとらえられている。しかし、自然的発達と文化的発達という二つの路線の交叉として子どもの発達をとらえる場合、そのような予定調和的な道筋はたどらず、より複雑な葛藤が存在しているという。「子どもの文化的発達の歴史から、子どもの教育に対して可能となる基本的結論は、以前には平坦な道とみえていたところで、常に登り道をとらねばならず、それまでは歩行に限られていたことで跳躍がなされなければならないということである」（C. 331：354頁）。

ヴィゴツキーは、基本的に「健常児の教育の分野とは原理的に異なっている」（C. 40：54頁）と主張する。「子どもの文化的発達の歴史は次のようなテーゼを提起することが可能である。『文化的発達は、欠陥の補償が可能な主要な分野である』。有機的発達がそれ以上不可能なところで、文化的発達の道が無限に開かれているのである」（C. 312：358頁）。ヴィゴツキーは何らかの欠陥により自然的発達の不全をきたし、文化的発達は起こりえないと考えるのではなく、むしろ、欠陥の補償により文化的発達の可能性は大きく開かれているととらえているのである。それは、前項でみたように聾唖児は健常児と比較した場合、文化的発達の特徴である媒介手段を用いて注意により頼ろうとする傾向があることから理解できる。

ここで、ヴィゴツキーは障害児の発達に独自の回り道の方略、具体的には空字、点字、口読などの独自の心理的道具による発達の過程をつくりだすことの重要性を述べているのである。

5. おわりに

本稿では『高次精神機能の発達史』における欠陥学研究の位置づけについて検討してきた。『高次精神機能の発達史』には、健常児だけではなく障害をもつ子どもの発達に関しても多くが論述されており、ヴィゴツキーはそれを自然

的発達と文化的発達の交叉と一致のなかでとらえようとしていた。障害児と健常児との違いをヴィゴツキーは次のように述べている。「障害は健常児にとっての困難とまったく同じように作用する。一方では障害は操作遂行の水準を低下させる。同じ問題が聾啞児には遂行し得ないものになったり、あるいは著しく困難なものとなる。この点に障害の否定的作用がある。しかし、障害は全ての困難と同じように、より高次の道へと、すなわち、われわれがみてきたように失語症患者や聾啞児が健常児よりもはるかに頼ろうとする媒介的注意の道へと子どもを突き動かすのである」(C. 205:290頁)。ヴィゴツキーが『高次精神機能の発達史』という理論的大著のなかに欠陥学研究を組み込んだ理由、それは欠陥児の発達が「高次精神機能を理解する鍵」だと考えたからに他ならない。

このようなスタンスは、1928年頃に執筆され草稿として残されていた『心理学の危機の歴史的意味』のなかに見出すことができる。ヴィゴツキーは一般心理学を構想しようとする際の書き出しの部分で次のように述べている。「心理学が研究する現象や本質や本性というものは、その極端な病理的な表現のなかにもっとも純粋な形で現れる。したがって病理学から正常へと進み、病理科学から健常者を説明し、理解すべきであって、従来行われてきたように逆のものと解するべきではないということである。心理学への鍵は病理学のなかにある」⁹⁾。健常児も障害児もいずれも文化的発達をとげる。ただ、その文化的発達の形態が異なるのであり、その筋道も異なってくる。ヴィゴツキーはその独自性を、この『高次精神機能の発達史』においても明確に示そうとしていたのである。

これまでのヴィゴツキー欠陥学研究において『高次精神機能の発達』がほとんど検討されてこなかった理由は不明である。ただ、大きくふたつの問題が関わっていると考えられる。第一に、ヴィゴツキーの膨大かつ多様な著作群において「欠陥学研究」として分類されるものはその内容からではなく、そのタイトルによって選択されてきた部分が多いという点である。例えば『ヴィゴツキー著作集』第5巻は「欠陥学」「盲」「聾」「困難児」「知的遅滞」などのタイトルが冠されているものだけであった。しかし、本稿で論じてきたように『高次精神機能の発達史』や『思考と言語』など一般心理学研究として、これまで比較的注目されてきた文献のなか

にも障害児教育に関する知見は散見できる。タイトルからの分類と整理はわれわれ後年の研究者にとっては理解しやすいものであるが、ヴィゴツキー自身は欠陥学研究とその他の研究を明確に分けて考えていたわけではない。それは本稿でも論じてきたように文化-歴史的理論においては障害をもつ子ども、ない子どもは同じ枠組みのなかで論じられるものであるとして理解されていたのである。第二に欠陥学における高次精神機能の発達という命題は当時としては非常に希少だったという点が挙げられる。当時の欠陥学研究では、子どもの障害に合わせて可能な範囲の治療教育が主流であった¹⁰⁾。それに対して、ヴィゴツキーは障害をもつ子どもの文化的発達である高次の心理諸機能の発達の可能性を指摘し、障害児の発達における重要性を主張したのである。このような二つの点は、これまで『高次精神機能の発達史』がヴィゴツキーの障害児教育の分野でほとんど検討さること理由に関連していると考えられる。今後、これら十分に検討されてこなかった著作を含め、欠陥学の知見がヴィゴツキー発達論の形成に与えた影響など、その全体性のなかで欠陥学研究を位置づけなおす作業が必要になってくるだろう。

註

- 1) ヴィゴツカヤとリファーフ(1996)の巻末資料「ヴィゴツキー著作一覧」によれば初期の文芸批評や小さな雑誌記事をあわせれば全著作は274本ある。そのなかで『高次精神機能の発達史』は1931年の項目欄に番号202で掲載されている(Выгодская&Лифанова, 1996, C. 403)。
- 2) 例えば、渡辺(1996)は障害児における文化的発達の問題を論じているが、『高次精神機能の発達史』を十分に検討しているわけではない。
- 3) Выготский, Л. С.(1960). А. Н. Леонтьев, А. Р. Лурия, В. Н. Чеплов (ред) Развитие высших психических функций. М. Изд-во АПН РСФСР.
- 4) Матюшкин, А. М.(1983). Комментарии. История развития высших психических функций. Собр. соч. т. 3. М. Педагогика., С. 354.
- 5) Выготский, Л. С.(1960). А. Н. Леонтьев, А. Р. Лурия, В. Н. Чеплов (ред) Развитие высших психических функций. М. Изд-во АПН РСФСР.
- 6) Выготский, Л. С.(1935). Умственное развитие детей в процессе обучения. Гос.-учеб. педагог, изд., Москва.
- 7) Выготский Л. С.(1928). Проблема культурного развития ребенка <<Педология>>, кн.1. С. 58-77.
- 8) 1974年に『欠陥学』に掲載されているシャフレヴィチの「ヴィゴツキーの業績一覧」のなかで

欠陥学は56項目とされている。その分類は定かではないが、タイトルや掲載誌の内容による分類がなされている。

- 9) Выготский, Л. С.(1982). Исторический смысл психологического кризиса. методологическое исследование. Педагогика. Собр. соч. т. 1. М. Педагогика., С. 293.
- 10) 当時のソビエト・ロシアの欠陥学研究については、McCagg, W. O.(1989) *The Origins of Defectology. The Disable in the Soviet Union : Past and Present, Theory and Practice.* を参照。

引用文献

ヴィゴツキーの文献

*本文中のヴィゴツキーの引用はすべて『高次精神機能の発達史』（Выготский, Л. С.(1983). *История развития высших психических функций.* Собр. соч. т. 3. М. Педагогика., с. 5-328.)からのものである。

Выготский, Л. С.(1928). Проблема культурного развития ребенка <<Педагогика>>. кн. 1. с. 58-77. (ヴィゴツキー Л. С. 中村和夫訳 (1990). 「子どもの文化的発達の問題」『心理科学』第12号, 第2号, 24-33頁)

Выготский, Л. С.(1935). Умственное развитие детей в процессе обучения. М. Гос.-учеб. Педагогика.

Выготский, Л. С.(1982). Исторический смысл психологического кризиса. методологическое исследование. Педагогика. Собр. соч. т. 1. М. Педагогика., С. 291-472. (ヴィゴツキー Л. С.(1987) 柴田義松ほか訳「心理学の危機の歴史的意味—方法論的研究—」『心理学の危機—歴史的意味と方法論の研究—』明治図書, 93-291頁)

Выготский, Л. С.(1960). А. Н. Леонтьев, А. Р. Лурия, В. Н. Чеплов (ред) Развитие высших психических функций. М. Изд-во АПН РСФСР.

Выготский, Л. С.(1983). История развития высших психических функций. Собр. соч. т. 3. М. Педагогика., с. 5-328. (ヴィゴツキー Л. С. 柴田義松監訳 (2005)『文化的—歴史的な精神発達の理論』学文社)

その他の研究文献

Выгодская, Г. Л. Лифанова, Т. М.(1996). Лев Семенович Выготский.: Жизнь Деятельность Штрихи к портрету. М. Смысл.

中村和夫 (1998). 『ヴィゴツキーの発達論—文化・歴史的理論の展開—』東京大学出版会

Матюшкин, А. М.(1983). Послесловие. Собр. соч. т. 3. М. Педагогика., С. 338-353.

Scribner, S.(1985). Vygotsky's uses of history. ed. J. Wertsch (ed) *Culture, Communication and Cognition.* NY. Cambridge University Press.

Van der Veer, R. & Valsiner, J.(1991). *Understanding Vygotsky : A quest for synthesis.* Oxford. Blackwell.

渡辺健治 (1996). 『ロシア障害児教育史の研究』風間書房